

超古代大陸 レムリア

黒沼 健



超古代大陸レムリア 黒沼 健 新潮社



超古代大陸レムリア

昭和四十二年四月十五日 印刷
昭和四十二年四月二十日 発行

定価 三〇〇円

著 者 黒 沼 健

発 行 者 佐 藤 亮 一
東京都新宿区矢来町七一

発 行 所 株式会社 新 潮 社
東京都新宿区矢来町七一

電話東京三石局二三番(大代)
振替 東京 八〇 八 番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

目次

レムリア大陸物語	五
超古代大陸レムリア	七
南海の白色人種	三四
シャスタ山の怪光	四五
人類は二世代を経た	五九
神秘的な話	六七
東洋の神秘	六九
金星人ベヌート	七六
死霊の口笛	九四
死から甦ったひとびと	一〇四
埋蔵金の靈気	一一三

小猫とクロロホルム……………二二〇

解けない謎……………二二七

人語を話す動物……………二二九

双生児奇談……………二二九

パン食いお化け……………二二九

指輪と首飾りの呪い……………二二九

不思議な飛行物体……………二二七

鈍行飛行物体……………二二七

姿なき襲撃者……………二二七

こうもり人間……………二二七

あとがき……………二二〇

超古代大陸レムリア

地 山 山 忠 敬
挿 図 本 本 忠 敬
真 絵 山 本 甚 作
本文 広 瀬 貞 雄

レムリア大陸物語



超古代大陸レムリア

わが郷愁のレムリア

レムリア(Lemuria)——私がこの言葉をはじめて知ったのは、戦前のことである。アメリカの「トルー」(True)という雑誌を読んでいたときに目にしたのだ。

それは、大洋州の原住民たちの原始的な漁獵のことを書いた文中にでてきた。

「……このへんは、かつてレムリア大陸のあったところで……」

とだけのものだが、私には、このレムリアという言葉が不思議と脳裡に深く刻みつけられた。

アトランティスは、プラトンの記述のため有名となり、関係文献はいまでは三千種を越すといわれている。むろんそれを子供の読物に書いた「アトランティスの秘密」とか、「アトランティス探検」などという本は、わが国でもでた。こうして、レムリアは、アトランティス同様の古代大陸の一種であろうという漠然たる知識をつかんだのであ

る。

このことは、そのままいつとはなく私は忘れ去つていた。

後に「ムー大陸」を中心とする「古代大陸物語」を書くことになったが、そのときにもレムリアのことは、さして念頭にはなかつた。

というわけは、ジェームズ・チャーチワードの「ムー大陸」の研究書には、レムリアなる文字は、どこにも出てこなかつたからである。

そして「ムー大陸」の研究を進めて行くと、必然的に「アトランティス大陸」「アトランティス文化」「アトランティス人」などという文字に行きあたる。

ところが、アトランティスのことを書いた文献には、ときにこれと対照的な大陸としてレムリアという名はでてきても、何故かムー大陸という文字は出てこないのである。

そして、アトランティスは、その名の示すようにいまのアトランティック・オーシャン（大西洋）に存在し——とここまではいいが——レムリアは、現在の太平洋の大部分を占めた大陸であつた——ということになるのである。

ドイツのケルン生れの敬虔なる仏教信者ディクホフ博士の「アガルタ」（ラマ教という「地底王国」である）は、「太平洋にあつたレムリア」という表現を用いている。

古代文化研究で有名なアメリカのM・ドリール博士によると、カロリン群島は、海底に沈んだレムリア大陸の高山の残骸で、その山嶺が海上に突出しているのであるといつてゐる。

ムー大陸は、あるとき地殻の大変動のため突如海底に姿を没し、レムリアまた同様の原因で海底に沈んだとなると、普通の観念ではムーレムリアと考えざるをえなくなる。

なかには、表面から堂々といまから一万二千年前に太平洋の大部分を占め、高度の文化を誇つていたムー大陸そのものである、というものすらゐる。

しかし、私には、このムーレムリア説はどうも納得できなかつた。といつて、これについて確実な根拠があつたわけではない。ただ、何となくそのような気がしてゐたのである。（もつとも、それにはチャーチワードの「ムー大陸」に、レムリアという名を見なかつたのも、あるいはその要因をなしていたかも知れない）

ところが、レムリアに関する文献を集めだすと、他の本を読んでゐるときにも、何処かにレムリアという文字が出てきやしないかと目を皿のようにする。すると、あるときムーレムリア説を掃るがす資料に行きあたつた。

その一つは、ルイス・スペンスの「レムリアの問題」で

ある。これには、ドイツの生物学者のエルンスト・ハインリヒ・ヘッケル（一八三四—一九一九）のレムリアの位置を示す想像図が載っているが、これによると、場所はいまの太平洋ではなく、西の端は現在のアフリカの西海岸に接し、東端は、インドネシアのへんまで延びている。その間のインド洋の大部分を占めているのである。

さらに、ある文献には、現在の地中海から小アジアにまたがる一帯の地を占めていたというのものもある。

しかし、これらはいずれも序の口で、そのうちにW・スコット・エリオットの「失われたレムリア大陸」を入手するに及んで、レムリアこそは、ムーやアトランティスと同列の古代大陸ではなく、その淵源はさらにさらに古い「超古代大陸」という言葉がびつたりする、それこそ天文学的な時点のもとでなくては考えられない大陸であることが判ったのである。

いうまでもなく当時の世界地図は、現代のそれとは全然別個で、火星が水星のそれではないか、と勘違いをするようなものである。

辞書とレムリア

そのようなわけだから、「レムリア」が一般から継子扱

いされていたからといって別に不思議はない。

試みに手近にある辞書を開いてみ給え。

その幾つに「レムリア」なる文字が記載されているか。

私の仕事部屋にも無理して、いろいろの辞書が買って置いてある。

先ず手近の日本のものを開いてみよう。残念ながら、これには普通の辞書にも百科辞典にも載っていない。

では、英語のそれは？

これも普通の辞書には出ていない。思い切ってブリタニカを開いてみた。

これには、載っていた——ろうか。これが実はノーなのである。レムリアは世界の辞書界にその優秀なることを誇る伝統と榮譽をもつ、ブリタニカにして扱う必要のない項目なのであるうか。

もつとも私の調べたのは最近の一九六三年版である。他の版には、あるいは載っているのかも知れない。

私は戦前、イギリスの女流推理作家ドロシイ・L・セイヤーズ女史の作品——そのなかでも、ピーター・ウイムゼイ卿という金持の貴族で、教養の高い素人探偵がでてくる所謂「ウイムゼイ物」が好きで、新青年にその短篇をよく訳した。

そのうちに「ナイン・テイラーズ」という、イギリスの

フエン地方のフエン・チャーチで盛んなキャンパノロジー (Campanology) —— 鳴鐘業とでも訳したらいいだろう。いくつかの音程をもつ鐘を交互に鳴らす、鐘の大交響楽に匹敵するような鐘業を小説の骨子としたものがあつた。

だいたい、*「ウイムゼイ物」*には、イギリス紳士の嗜みともいうべき葡萄酒の鑑定とか、初期の活字本としてのその方面で珍重されているインキュナビュラについての該博な知識といったような貴族趣味的な雰囲気で殆ど全篇が飾られてゐる。

このキャンパノロジーというのは、*「イギリスに特有のもので、他の国にはどこにもない」*という代物で、およそ難解なることこの上もない。丸善に参考書を探させたりして、その半ばを訳し終えたとき第二次世界戦争となり、推理小説(当時は探偵小説といつていた)の翻訳どころではなくなつた。

訳しかけの原稿は、参考書などといつしよに納戸の奥へ長いこと放り込んであつた。

このキャンパノロジーの参考書なるものが、いずれも部厚な上に、およそ専門的なもので、これを読みこなすだけで大変な努力が要つた。もっと簡単に書いたものはないかと探していたら、戦後真先に手に入れたウエプスター

の第二版に、Change Ringing (キャンパノロジーのことは、こうもいうのである)として一ページの四分の一ほどの分量に纏めて、要領よく説明してある。

(レムリアのことが、いつのまにかキャンパノロジーに脱線したのは、イギリス固有のもので、イギリス人にしか理解できないキャンパノロジーが肝腎のブリタニカに出ていなくて、ウエプスターに出ているのは、どういふわけであらうかといいたかつたのである。同時に、キャンパノロジーが載っていないくらいだから、レムリアについてノー・コメントであるのは当然である、ともいいたかつたのだ。

もっとも、聞くところによると、何年か前にでた第何版とかのブリタニカには、キャンパノロジーが説明されているそうだが、*「ナイン・テイラーズ」*の翻訳をつづける気持のないいまの私には、そんなことはもはやどうでもいい) ところで、ブリタニカに出ていないキャンパノロジーがウエプスターに出ているのだから、レムリアもひよつとすると出ているかも知れないと、私は早速重い辞書をやつたらさと仕事部屋へ運んできてその部をしらべて見た。

ところが、これがちゃんと載つていたのである。もっとも、およそ簡単に、わずか三行の説明にすぎないが、ともかく載つていたので。

「伝説の大陸で、いまのインド洋のへんにあつたといわれ

ている。

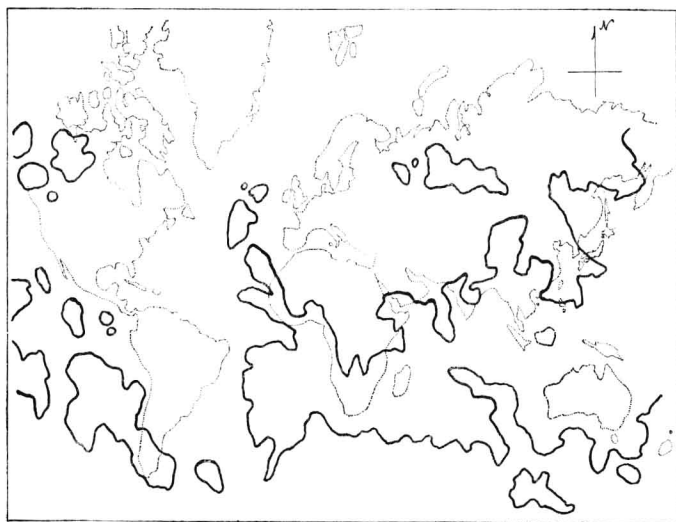
とあるではないか。そこで、次には、エンサイクロペディア・アメリカーナを調べてみた。ところが、これには相当詳しく説明されている。

そもそも名の起り

アメリカーナによると――

レムリアは、インド洋から太平洋の一部にわたって存在した先史時代の大陸ということになっている。

レムリアの名のそもそもの起りは、イギリスの動物学者フィリップ・ラッツリ・スクレーター（一八二九―一九一三）が、十九世紀の半ば頃、マダガスカルにいる「レムウ」(きつね猿――一種の猿だが、顔は狐のように尖っている)がモザンビク海峡ひとつ隔てたアフリカ大陸には絶無のこと、反対に、インド洋のセイロンや、東南アジアのスマトラに同類が棲息していること、そしてその化石の一部は約五千万年前(近生代の初期)の地層のなかから発見されたことなどから、マダガスカルはアフリカの一部というよりは、それからインド洋を越して東南アジアにまで延びていた古代大陸の西の端の名残りではないかと一つのサジェスションを発表したのである。



ところが、これにはたちまち同調者があらわれた。一人は、ドイツの有名な生物学者であるエルンスト・ハインリヒ・ヘッケル（一八三四—一九一九）で、もう一人はプロシヤ（ドイツ）の神智学者のエリーナ・ペトロヴナ・ブラツキイ女史（一八三一—一八九一）である。

ヘッケルは、その名著「創造の歴史」(Natürliche Schöpfungsgeschichte)にレムリア大陸の存在を推定し、その巻頭には、彼の筆になる「レムリア大陸の地図」を載せている。

その後「レムウ」(きつね猿)の化石が、ヨーロッパや北アメリカで発見されて、その分布の様子が明確になるとこれまでレムリア大陸に興味をよせていた学者のなかにはこれに関心をもたないものが多くなった。

だが、私にいわせれば、これは間違いも甚だしい。彼らは、レムリア大陸を、現在の地球上にみる大陸なみの大きさで判断していたのである。これは後に述べるW・スコット・エリオットの初期のレムリア大陸の地図を見れば判る通り、この超古代大陸の大きさは、現在の大陸の広さとは比較にならない宏大なものだったのである。つまり「レムウ」の化石の分布の範囲の広いことは、いわばこの証左といわなければならないのだ。

二十世紀のはじめに、ルドルフ・シュタイナー（一八六

一—一九二五）という哲学者が、特異の体系の学問を創造した。

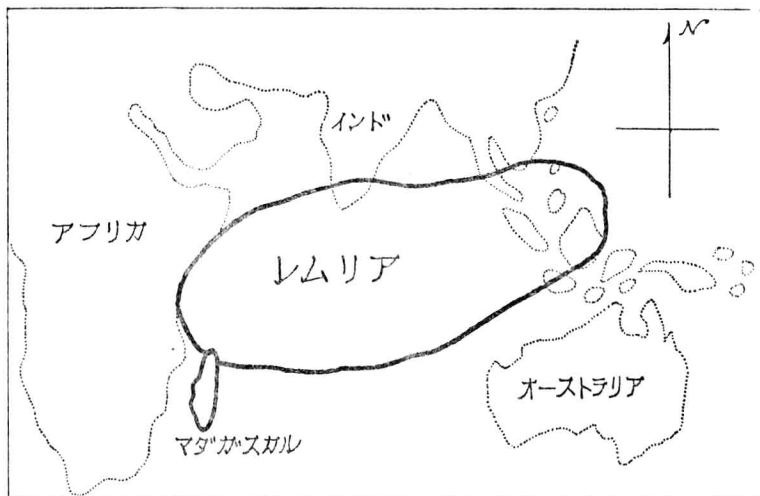
「アンソロポソフイ」^{ユスモソフイ}という難しい名がついている。これは従来の哲学に宇宙学を結びつけたものである。人類の先祖は、現在の生物学で説くような、この地上で生まれたものではなく、地球上の生物とは別個の発生源をもつものであると説いた。このシュタイナーの説は晦渋にすぎたか、ついに一般には受け入れられないままに一九二五年に死んだ。彼の尊い学説は、ここで地上から姿を消してしまったのである。

私にいわせれば、シュタイナーこそは、いつか「失われた古代科学」への架橋に成功した人物ではなかったかと思うのだが、いまとなつては幾ら悔いても及ばない。

代つて世に受け入れられたのは、およそ哲学的考察からは離れた即物的の傾向のもので、古代の伝説、伝承、記録などを根拠として発想を助けているいわゆるレムリア学者たちの説である。

アメリカナには、レムリアに別の名をあたえた人物としてジェームズ・チャーチワードをあげている。しかし、このレムリア大陸物語が展開するにつれて、自然に判ることと思うが、レムリアとムーは別個のものである。

巷間にムー (MUI) 大陸のことをミュー大陸という人が



ある。

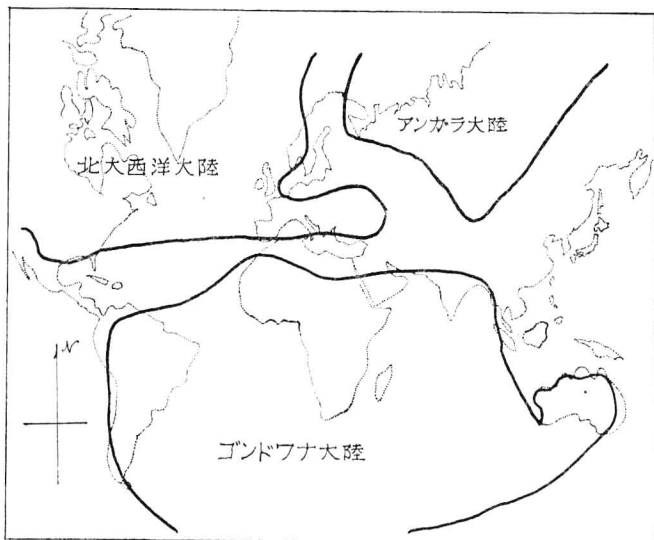
しかし「ムー」は「ミュー」ではなく (Moou) と発音すべきであるとチャーチワード自身、その著書のなかで明言しているのである。

一方、アメリカーナによるとレムリアは、レミューリアと発音すべきであると、わざわざ発音上の注意をあたえている。(この物語では、繁雑をさけて簡単にレムリアとすることにした。読者の頭のなかだけで承知しておいて頂きたい) 恐らく、レミューリアのミューが、ムーをミューと発音させるに至った動機かも知れない。

その広さについて

先にも書いた通り、エリオットの「レムリア物語」にある初期レムリア大陸は、現在の地球上の大陸の分布とは、似ても似つかないものである。あるとき逆さにして見たら、それが現在の地球上の大陸の分布に似ていた。

これに比べると、ヘッケルの地図は、描写が簡単なせい、分布が明瞭な上に、何かを彷彿させるものがある。はじめ、その「何か」がなかなか判らなかつたが、ある必要から地質学でいうゴンドワナ大陸を調べることがあり、古生物学の本を開いて見たら、そこでたちまち氷解した。



ヘッケルの描いたレムリア大陸は、その位置からも、大きさからも、ゴンドワナ大陸と非常によく似ているのである。

エリオットの初期のレムリアについては、いつの時代とも説明していない。恐らく現在の地質学上の年代では区別ができないのか、それともそれに当てはまらないのか、特別に説明していない。

だが、恐らくデヴォン紀（三億二千万年前にはじまって二億六千五百万年前に終わった地質年代）以前、カンブリア紀（五億二千万年前にはじまって四億四千万年前に終わった地質年代）以後の頃——古生代——のことではないだろうかと思うのである。それ以前になれば原生代になってしまう。

しかし、考えようによっては、右の地質年代は地球人の考察によったもので、エリオットの地図にある地球の諸大陸は、人類の祖先はこの地上で生まれたものではないという、宇宙人地球飛来説に基づいているのかも知れないのである。（宇宙人地球飛来説は別の機会に書くことがあるかも知れない。プリンスリー・ル・ポア・トレンチのよきな天空人（Sky People）の研究家もいるのである）

ゴンドワナ大陸は、古生物学上の名称だが、古生代の末から中生代にかけて、南米からアフリカ大陸の殆ど全部を